

# 出会いは世界を広げていく

## 交流会を通して

第6回

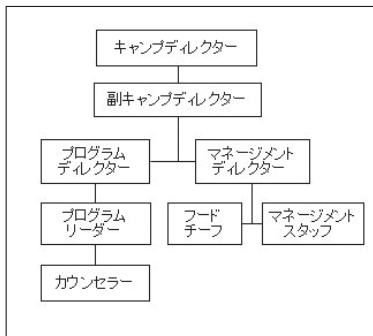
土肥いつき DOHI ITSUKI

京都の公立高校教員。24時間一人バレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

### プログラムってなんだろう

前号（8月号）に書いたように、わたしは2回のカウンセラー経験で、まったく反対のグループ運営をしました。ひとつは徹底的な介入でした。そしてもうひとつは徹底的な放任でした。両方のグループ運営をして、なんとなく感じたことは、きっと両方とも違うだろうということでした。翌年、わたしはプログラムディレクターを任されました。

実は、今号の原稿を書いている最中に、当時の資料を発掘することができました。その中に当時の組織図があったので



掲載します。この図にあるように、まず、各グループを担当し、メンバーとともにプログラムを実行するカウンセラーがいます。

その上に、グループを持たずにプログラムを進行するプログラムリーダーがいます。プログラムディレクターは、キャンプ全体のプログラムを組み立て、キャンプ当日はプログラムリーダーやカウンセラーの協力を得ながらプログラムを進行する責任者になります。

はじめてのプログラムディレクターはたいへんでした。当時のわたしは、プログラムリーダーとして、あるいはカウンセラーとして、すでに定められたプログラムに従ってキャンプを進行した経験しかありませんでした。最初に提示したプログラムは、自分の経験に基づいて漫然とプログラムを並べただけのものだったような記憶があります。キャンプディレクターから「そのプログラムをなぜそこに配置したのか」と問われ絶句したこともありました。キャンプ当日も細かな「詰め」ができていないため、夜のリーダーミーティングで「詰め」をしなくてはなりませんでした。本来なら疲れをとるために寝なければならない時間に延々とミーティングをしているわたしに、キャンプディレ

クターは「そんなことは今することじゃない！」と一喝しました。キャンプそのものはすべてのリーダーの協力のおかげでうまくいきましたが、プログラムディレクターとしては失格だったと思います。そんなわたしでしたが、翌年の「やまびこキャンプ」で、再びプログラムディレクターを任されることになりました。

プログラムディレクターとしてあらためて考えたことは、プログラムとはいったいなにかということでした。キャンプはもちろん楽しいものです。しかし、ただ単にメンバーを楽しませればいいのかというと、それは違います。キャンプの目的は、キャンプを通して、個々のメンバーの成長をめざすことです。そこで大きな役割を果たすのがグループです。個々のメンバーの成長をグループが助け、個々のメンバーが成長することでグループも成長していきます。そんなメンバーやグループの成長に直接かかわるのがカウンセラーです。しかし、カウンセラーひとりでメンバーやグループの成長をサポートするのは不可能です。そんなカウンセラーをサポートするのがプログラムです。つまり、ひとつひとつのプログラムをこなすことを通して、カウンセラーはメンバーやグループの成長をはかるのです。プログラムはその目的に沿って配置することになります。では、キャンプ全体をプログラムで埋め尽くせばいいのかというと、それもまた違います。そのようなプログラムは、わたしの一度目のカウンセラーで経験した徹底的な介入になります。つまり、適度な介入と適度な放任の両方が必要であるということです。このように考えると、自然とプログラムの配置は決まります。わたしはようやく前年のキャンプディレクターの「問い」に答えられるようになりました。

この時にキャンプディレクターとして考え、実際にキャンプを運営した経験は、その後の担任としてのクラスづくりや放送部の顧問としてのクラブ運営、あるいは「場づくり」や交流会の運営に大きな影響を与えています。そこで次号には、この時の「やまびこキャンプ」について、もう少し書こうと思います。